

北海道民間説話の研究(その六)

キリスト教伝道者・小谷部全一郎とその評価

——『成吉思汗ハ源義経也』の背景考察——

阿 部 敏 夫

目次

はじめに

第一章 小谷部全一郎の生涯と業績

第二章 キリスト教伝道者として

第一節 日本基督教団横浜紅葉坂教会牧師時代

第二節 『ロビンソン・クルーソー』の訳者・生田俊彦の見解

第三節 福島恒雄の考察

第三章 小谷部全一郎『純日本婦人の倂』にみるキリスト教伝道者
おわりに

はじめに

『成吉思汗ハ源義経也』の著者小谷部全一郎は自ら吐露しているように「ロビンソン・クルーソー」のような数奇な生涯を過ごした人物である。本論文は、その数奇な生涯からどのようにして「義経IIジンギスカン説」が誕生したかの背景をキリスト教伝道者の側面から追究したものである。デイビッド・グッドマンがその著で次のように指摘していることを本論文は課題意識としている。

「……日本民族はキリスト教を神道として表現してきた、と考えたわけだが、これは明らかに習合的な神学の立場である。かれはいつていた。わたしがキリスト教を学んだのは、神道を高揚して、日本民族に

キーワード：小谷部全一郎 キリスト教伝道者 源義経 成吉思汗

より役立つようにするためだった、と。……」(注1)

第一章 小谷部全二郎の生涯と業績

『北海道大百科事典』北海道新聞社一九では、次のように解説(岡村正吉執筆)されている。

——一八六八(明治元)——一九四一(昭和十六)

教育家、著述家。秋田県生まれ。十四歳の時上京。一八八八年(明治二十一)米国へ渡航、エール大学などで神学を学ぶ。アメリカインディアンとアイヌとの境遇の類似に心を動かされ、アイヌ教育を天与の使命と自覚する。一八九八年帰国後直ちに北海道旧土人教育会を創設する。(会長二条基弘公爵)。東京神田美土代町のキリスト教青年会館での大演説会で小谷部の話を聞き生涯の方針を決めた学生がいた。これが白井柳治郎(アイヌ教育家)であった。一九〇一年(明治三十四)白井を伴い北海道に渡り、胆振の虻田(現洞爺湖町)の地をトしてアイヌ子弟のための第二小学校の設立に奔走し、白井を専任教員に推薦するとともに夫人及び幼い長男をも呼び寄せ、虻田に定住。北海道全域から選抜された義務教育終了後のアイヌの青年たちに職業教育を施す理想に燃え、虻田実業補習学校を建て吉田巖をその教師に採用した。だがその心魂を傾けた努力も実らず在住八年で失意のうちに退道、後事を吉田と白井に託した。その後は東京府荏原郡大井町で著述業に入り、『成吉思汗は義経也』などの奇説で名を残している。(一線は阿部)(注2)

(一六)

第二章 キリスト教伝道者として

小谷部全二郎は、前半生、キリスト教伝道者として活動した。その活動内容をうかがわせる記述を紹介する。

第一節 日本基督教団横浜紅葉坂教会牧師時代

日本組合基督教会系である横浜紅葉坂教会の二代目牧師が、『源義経ハ成吉思汗也』の著者小谷部全一郎である。紅葉坂教会時代の小谷部については同教会『百年史』には、巻末の年表記述を除くと下記の二ヶ所に記述されている。

記述(一) 講義所から日本組合横浜基督教会へ 一八九四年(明治二十七年)五月二十日講義所所属の信徒及び横浜在住の地方組合教会会員が相談して規約を定め、教会を組織し、日本組合教会関東部会の協賛を得て、伝道教会を設立、日本組合横浜基督教会(以後、横浜組合教会)と称した。(中略)一八九八年(明治三十一年)五月十五日、伝道開始五周年の記念会を開催した。(中略)初代牧師堀貞一は、一八九九年(明治三十二年)二月、前橋教会に招聘され横浜の地を去った。しかし、三月には、イエール大学で哲学博士号を取得した小谷部全一郎牧師を迎えた。小谷部牧師は、着任早々会堂焼失という不幸に遭遇するのである。同年八月、雲井町で発生した火事は強風に煽られて市の中心部の三、二〇〇戸を焼き尽くし、教会も灰燼に帰した。後に伊勢佐木町大火と記録された。半鐘の音に気付いた昌臧少年は、父と共に

に教会に駆けつけ、ペビオルガンを持ち出した。……小谷部さんが大きな布切れ包みを（後で判ったが讚美歌や聖書が入っていたのだ。）サンタクロースもどきに肩にかついで、私の前を野毛坂の方へ急いで通られた。……〔六十年の思い出〕 教会は、宮崎町九番地を牧師宅とし、牧師宅と、戸部教会（メソジスト）を借りて集会を開いた。同年十月小谷部牧師は辞任し、北海道に渡りアイヌ子弟教育のために働くことになった。D・C・グリーンをはじめ、東京組合諸教会の牧師の支援を受けて集会は維持されたが、相次ぐ困難の中、他教会との合併の話も出されるなど、まことに教会存亡の危機の時であった。しかし、神は教会員の熱い祈りに応えられた。同年十二月十五日、戸部一丁目六番地に一戸を借り、仮会堂とすることができた。一九〇〇年（明治三十三年）、無牧の教会に新しい牧師が与えられた。七月、平田義道牧師が大阪教会から着任した。（二二―二十五P）

注：―線は阿部、以下同じ、年月日・戸数表記は算用数字に変更。

記述(二) 二代 小谷部全一郎 任期 一八九九（明治三十二年）三月―十月

略歴 一八六八年一月十七日（慶応三年十二月二十三日）に出羽の秋田で誕生。東京本郷原町要義塾を経て、一八八八（明治二十一年）年六月十五日、神戸より帆船「トーマス・ペリー」号で渡米する。ヴァージニア州のハンプトン師範学校を経て、一八九〇（明治二十三年）年にワシントン市のハワード大学で学び、さらに一八九四（明治二十七年）

年エール大学大学院で神学を専攻し、翌年ワシントン市第一会衆教会で按手礼を受ける。三年間、ハワイ伝道会社のもとで先住民の伝道牧会に当り、再びエール大学での研究生活に入り、一八九八（明治三十一年）年哲学博士号を受け、同年十二月二十五日帰国する。翌年三月在京宣教師の推挙によって、横浜組合基督教会の牧師に就任したが、病気のため在任八ヵ月で辞任された。その後、北海道に渡り、一九〇〇（明治三十三年）年北海道土人救護会を創立し、わが国ではじめてアイヌ人のための実業学校を設立した。一九〇九（明治四十二年）「北海道土人保護ニ関スル建議」を帝国議会に提出し、以後東京にとどまってアイヌ人教育振興の運動を続け、その間に国学院大学講師を務め、一九二四（大正十三年）年には奇書といわれる『成吉思汗ハ源義経也』を出版している。一九四一（昭和十六）年三月十二日に召された。七十四歳。（二二―四P）

注：上記記述(二)の文章に続いて、猪俣昌臧『六十年の思い出』中の小谷部について書かれている部分の転載引用がある。その引用内容は、『日本版 ロビンソン・クルーソー』に書かれている数奇な前半生、かなり奇抜な面、日本語力・日本語教育に関する逸話が書かれている。

第二節『ロビンソン・クルーソー』の訳者・生田俊彦の見解

生田俊彦氏は小谷部全一郎（四子）の長女伊佐子の娘（正子）婿である。生田氏は小谷部の『A Japanese Robinson Crusoe』（注②）訳者でもある。氏は『吉田巖 資料集―1』（帯広叢書第三十五巻）（注

4)で、横浜紅葉坂教会時代の小谷部について次のように記述している。

全一郎が十年間のアメリカ生活に終止符を打って帰国したのは、明治三十一年、三十二歳である。横浜港に上陸したのは、奇しくも十年前にニューヨークに上陸した日と同じ、十二月二十五日クリスマスの日だった。帰国後、仙台出身の石川菊代と結婚して、しばらく横浜の紅葉坂教会で牧師を勤めたあと、北海道の洞爺湖に近い虻田村(現・虻田町)に移住し、社団法人北海道土人救護会を創立し、わが国ではじめてアイヌ民族のための実業学校を設立した。(中略)全一郎は、ワード大学、エール大学、同大学院にまで学んで帰国したのだから、欧米の学問導入に積極的だった当時の時代背景を考えれば、名譽も地位も富も容易に手にすることができ、陽当たりのよいエリートコースを歩いて、十分に人生を謳歌できたはずである。

第三節 福島恒雄の考察

福島恒雄氏は『基督教學 第20号』(注5)で次のように論及している。

(小谷部牧師のその後については)「他の組合教会史関係資料にも筆者が見たものの中には殆ど見ることができない。道内の教会史資料をみても不思議と思うほど小谷部について書かれたものはない。」ただ、一八九九年十二月に出された『北海道教育雑誌八十三号』や「一九六

(一八)

三年に出された『北海道教育史全道編(三)』にはアイヌ教育者としての功績について書かれている。ただし、後者の記述には「小谷部がキリスト者であつて、しかも横浜組合教会の牧師であつたことが明記されている。」(一九〇八年明治(四十一)六月に小谷部自身の書いた履歴書が残されているが、彼はキリスト者であることも、神学を学んだことも、按手礼を受け、牧師となったことも書いていない。わずかに関係社団の項に、帝国教育会会員、東京人類学会員、日本歴史地理学会員と共に、東京基督教青年会会員とある。小谷部自身が短期間で牧師を辞めたことなどあつて、あまりふれたくない心境であつたかもしれない。それ故に、アイヌ民族の教育者として記されることがあつても、キリスト者として、或は牧師として記されることはなく、道内の教会と関係することもなかつたらしい。ただ、後に見た虻田町史の虻田実業補習学校の項に「社団法人北海道旧土人教育会私立虻田実業補習学校の責任者で指導者である小谷部全一郎は生粋のクリスチャンであつた」とある。そう感じさせる生き方であつたのであろう。(中略)北海道とは殆ど関係なく、その所属していた教派・組合教会(Congregational Church)の中にもアイヌ民族の伝道教育についてふれたものが全く見られないのに、何故、小谷部はアイヌ民族の教育をその生涯の事業としたのであろうか。」

その理由を福島氏はワード大学(リンカーンによる奴隷解放宣言後四年目に創立。現在も人種差別撤廃を校訓の一つとする。)やエール大学で学んだ後のハワイ伝道会社(ハワイの先住民民族カナカ族の教育

に携わる。)の経験を挙げてている。

第三章 小谷部全一郎『純日本婦人の倂』にみるキリスト教伝道者

小谷部全一郎自身、後年その著書『純日本婦人の倂』の中で次のように述べている。

「新婚早々の吾等は、殆ど無一物より新しき小家庭を作り私は東京に在住の米国宣教師グリーン氏の下に、横浜組合基督教会の牧師となりてありしが、月給とは名のみにて米代にも足らず、妻の菊代は無報酬の女伝道師の如くに教会員の家庭を訪問し、髪などは無雑作に自分で結び、白粉などつけたることなく、日常貧苦と闘ひつゝ、ありしが、私は兎に角、妻は若き身そらであるに拘らず、世間普通の女の身だしなみも出来ぬ心情を可哀想に思ふと共に、私も弱き人間の常として、時には不平も起りしと云ふは、グリーン氏も私も同じ米国の大学神科を出て按手禮を受けて牧師となりたる身なるに、一方は皮膚の色が白しと云ふことよりなるか、日本に來りて華族も及ばぬ生活を営み、麻布の高台に堂々たる洋館を構え、二人の女中に料理人や車夫まで召使ひ、細君は女伝道師として夫君と同じく高給を本国より受け居るに、黄色の皮膚の持主たる私は、陋屋住ひにて召使など置く余裕なく、常に清貧洗ふが如しといふ事にてありしが、之に對し若妻の菊代は一言も不平

を洩さず、私に事へたる其の忍耐力と心事の高潔なるには、私は常に窃に泣かされてありしなり。斯くして居る間に、端なくも私の一身上に心機転換の一大事の起りたりと云ふは、或日曜の集會に私は教壇に起つて祈禱を捧げ神の道を説いて居る時に、靈感に打たれたる如くに私の心に浮び出でたるものは「吾は洋服を身に纏ひたる日本の神主の如き事を為し居れば、寧ろ此の洋服を脱ぎ棄て、歴代の天皇が御遵奉遊ばさる、神道の神職となりて、濟世救民の天業に従事するに如かず」と。斯く思ひては矢も楯もたまたらず、早速教会に辞表を出して上京し、以前よりも一層苦しき清貧生活に甘んじ、神職の資格を得るに必要な国学の研究に従事しつゝ、要路の人士を歴訪して、斯道発揚の急務を唱道してありしが、異教者なりとて容易に耳を藉す者なく、僅に宮内省掌典宮地巖夫翁と日比谷大神宮管長藤岡好古翁及び靖国神社の賀茂宮司等が私に満腔の同情を寄する位のものにて、他は多く毛嫌ひする狭量の輩なれば、時期尚早と諦め、救民の第一着手として、人の顧るものなき無告可憐の北海道旧土人の救済教育の爲めに微力を捧げんと心に決し、近衛篤磨公を始め朝野の人士に説いて之が賛助を求めたるに、忽ちにして多くの同情者を得たるより、社団法人の會を組織して実行の基礎を固め、斯くして吾等兩人は北海道に赴き、(後略) (注6)

小谷部全一郎が自らの著書で横浜組合教会時代について上記のように述べている。教会が横浜伊勢佐木町大火に遭遇し、教会の存亡が問

われている時に小谷部の取った「行動」は理解に苦しむ。病気が辞任の理由ではないことは明白である。

おわりに

(一) 小谷部全一郎のキリスト教信仰とその背景については、福島恒雄氏の前掲書「研究ノート」の末尾部分の記述に私は現在のところ尽きると考えている。また、近現代日本のキリスト教受容史における小谷部の時代的人間的制約も考慮しなければならぬだろう。そしてキリスト教伝道者小谷部全一郎の問題は、今日に生活するキリスト者にも存在する問題だろう。

「彼の信仰的思想の変容は彼自身の生立ちや、性格とも深く関わっていると思われる。学問的思想的孤独感、教会的信仰的孤立感などを経験して歩んでいる。小谷部が北海道にきたときはすでに組合教会が教派として道内の伝道をしていたが、その交わりは見られない。…彼の思想は明治のキリスト者の中でみられた国粹的愛国心を内に秘めて聖書を読んだ一人のキリスト者であったことであろう。アイヌ民族の教育についてもその枠を越えることは出来なかつたが、本心から願っていたのは、差別の中に在ったアイヌ民族の人格を重んじ、自由と独立の精神を涵養することにあつたのである。晩年はキリスト教から離れて神道に傾斜し、シンクレテシズムになつたが、彼自身の理解した神学と教会観の微弱さに問題があつたように思われる。それは明治期に

おける福音受容の問題として別に再考せらるべき課題であろう。」

(二) 小谷部全一郎のキリスト教思想は、第三章の『純日本婦人の倂』の記述に見ることが出来る。同様な記述は、一九二九年(昭和四)発行の『日本及日本國民之起原』の序文にも見ることが出来る。「著者は重ねて云ふ、日本は神國なり、國祖發祥の聖地も亦神國にして、神祖の實き血脈の今尚我等子孫の肉身に流るる事実に照すも日本は神國なりと、而して之を闡明する主意の下に筆を本書に執れる也。」(八pより)

(三) 本論文は、小谷部全一郎のキリスト教伝道者時代に焦点を当てたが、今後の小谷部全一郎研究の課題は山積している。例えば、米國時代のキリスト教受容問題、キリスト教から神道に突然転換したようにみえる問題(本論文の課題でもあるが)、アイヌ教育に対する思想問題・北海道虻田学園創設と運営について、小谷部全一郎全著作の考察からみた『成吉思汗ハ源義経也』の分析、小谷部全一郎の神秘主義とその時代背景などである。そして『日本及日本國民之起原』の詳細な分析、日猶同盟との関連等の問題である。

謝辞

本論文は、日本基督教団紅葉坂教会牧師北村慈郎牧師、日本基督教団札幌北光教会山下信行兄、北星学園大学図書館、帯広市図書館、洞

爺湖町教育委員会、秋田県立図書館、秋田市史編さん室を始めとする
たくさんの方々にお世話になりました。今後ともご指導ください。

〔注〕

- (1) デイビット・グッドマン＋宮澤正典・藤本和子訳『ユダヤ人陰謀説——
日本の中の反ユダヤと親ユダヤ』講談社一九九九・一一二—一一三p
- (2) 小谷部全一郎の生涯と業績については、浦田広胖『民族問題叢書Ⅰ』明
治のアイヌ・インディアン認識——明治期の知識人と先住民族——一
九九〇自刊本、『秋田さきがけ』新聞一九九三年二月十五日から同年四月
六日までの連載記事（三十八回）に詳しく紹介されている。
- (3) 『ジャパニーズ・ロビンソン・クルーソー』生田俊彦訳 皆美社 平成
三年 二四九p
- (4) 生田俊彦『小谷部全一郎という人——理想の実現に邁進した不屈の生涯
——』『吉田巖資料集Ⅰ』（帯広叢書第三十五巻）一一二p、
福島恒雄『北海道キリスト教史研究に關わって——小谷部全一郎のこと
ども——』、『基督教學』第二十号 北海道基督教学会 一九八五 二三
p、
- (6) 『純日本婦人の傳』厚生閣書肆 昭和十三年四月二十日 一二四p、一〇
—一三p

〔参考文献〕

- ・『日本基督教団紅葉坂教会百年史 一八九三—一九九三年』・横浜・日本
基督教団紅葉坂教会 一九九三年五月九日
- ・ノーマン・コーン 内田樹訳『ユダヤ人世界征服プロトコル』ダイナミツ
クセラーズ出版 二〇〇七
- ・デイビット・グッドマン『反ユダヤ主義者としての桃太郎』、『世界』一九

八八年一月号第五〇九号 岩波書店

・内田樹『私家版・ユダヤ文化論』中公新書 文藝春秋 二〇〇六

尚、「本文」や「注」中に文献名を明示したものについては、一部を
除いて「参考文献」掲載を省略した。

[Abstract]

A Study of Hokkaido Folk Tales No.6:

A Study and Evaluation of Zenichiro OYABE, a Christina Missionary
“the Legend of Yoshitsune=Genghis” Khan”

Toshio ABE

After receiving PhDs in philosophy and theology from Yale University in the United States, Zenichiro Oyabe came back to Japan in 1899 and was assigned to be the second minister at Yokohama Momijizaka Congregational Church the following year. However, in order to concentrate his work on the education of young Ainu students, he resigned from that position after ten months. Later, he established the Abuta Gakuen, a vocational school for Ainu people in Abuta-cho (current Toya-cho), Hokkaido and made every effort to run the school for the next ten years. After coming back to Tokyo in adversity, he lectured at Kouten Kougisha and Kokugakuin and devoted himself to writing the book entitled *Genghis Khan wa Miyamoto no Yoshitsune nari* which was published in 1924. Thanks to this book, Yoshitsune became a national fad. This paper examines the thoughts of Zenichiro Oyabe, who played as a Christian Missionary, and these evaluations.

(111)